

「仲島正教」の教職論についての一考察

A discussion in theories of teachers of Masanori Nakashima

芝垣 正光

SHIBAGAKI Masamitsu

Abstract: The present study was discussed the Nakashima's theory of teacher. There were the wonderful meeting, the hot correlation, and the great impression in the work of the teachers. The characteristic work of the teachers was like the mirror. When the teachers did not the best, the children did not respond to the teachers with the best. The young is the best. The teachers had to refute the other teachers at the meeting of the teachers. The important things were summarized as the followings. They were to educate the handicapped children, encouraging the children with praise, the study, and the teaching the composition such as the children hoped to write. The education of human rights was the making of the class and the company. It was discussed that the physical training learned how to live as human.

Keywords: Masanori Nakashima, theory of teacher, one discussion

1. はじめに

これまで近代日本を代表する福沢¹⁾、沢柳²⁾、野口³⁾、倉橋⁴⁾、小原⁵⁾の教職論があった。近年、戦前・戦後を通して高等女学校・新制中学校の国語科教師であった大村の教職論が出された⁶⁾。続いて、2008年に仲島の教職論が出された⁷⁾。

仲島は、一年の臨時助教諭を経て、1979年に小学校の正規の教師となった。以後26年間教師生活で、最後の教育委員会主導主事の時に、若い教師を育てる教師塾を開くことを決めた。反対意見が同僚教師から多くあったが、教え子の後押しもあって教師を退職し、「若手教師育成塾」を立ち上げた。教師は学級で「子どもを躍動させる」ためには、どうすれば良いかについて、教職論を述べた。そこで、このような仲島の教職論について、一考察を論じた。

2. 教師の仕事の魅力

仲島は、教師の仕事の魅力について、素晴らしい出会い、温かなつながり、最高の感動があると言った⁸⁾。最高の感動は卒業式で、子どもが泣きながら教師に抱きついたこと。子ども達が教師の周りに来て泣いた。教師としてこんな嬉しいことはない。他に同じような感動は、次のような卒業試験であった。子どもに「人間のいい順で一列に並びなさい」と。日頃子どもに「人間にはそれぞれいいところ、悪いところがあって、決して順位はつけられない」と言っていた。子どもは「このクラスには、悪い人はいません。皆いい人で、順位はつけられない」と。しかし、最後に子どもが出した解答は、男女交互になって、中を向いて一つの輪になった。

卒業式で教師の周りで子ども達が泣いてくれたことについて、仲島は次のように教師が平日頃子

どもと接しているからだと言った。教師が一日中子どもと一緒に過ごした。休み時間、昼休み、放課後と時間がある限り、子ども達と一緒に遊び、話をしたと。また、卒業試験で子ども達が輪になったことについて、普段の授業や生活で、「必ずできると信じる」学級づくりをしたと。

著者も卒業式に幾度も出席し、仲島と同様の経験をした。担任の教師の周りに子ども達が来て、お互いに泣いているのを幾度となく見た。仲島がいった最高の感動を幾度も経験した。

3. 教師の仕事の特徴

仲島は、教師の仕事の特徴を次のように言った⁹⁾。一般的な教師の仕事を10とする。6や7の仕事では、子どもの反応はやはり6や7である。しかし、13、14と仕事をすると、子どもの反応は13、14となる。この鏡のような仕事である。やればやるだけのことが返ってくる。やいがいのある仕事であると。いい加減な教材研究をした授業では、子どもは飽きてしまう。教師が十分な教材研究後一生懸命に授業を行えば、少々授業が下手であっても、子どもは授業を理解する。

これに対して、大村は教師の仕事の特徴は、「仏様の指」のようではなければならないと言った¹⁰⁾。ある農夫が荷物をたくさん積んだ荷車を引いていた。その時、荷車が泥のぬかるみにはまった。農夫が一生懸命に努力したが、荷車は動かなかった。そこで、仏様が少し指でその荷車に触れられた。そうすると、荷車が泥のぬかるみから出て、動き出した。農夫は仏様の力があつたことは、知らない。自分が努力して、荷車を動かしたと思った。仏様の力で荷車が動いたと知ったら、農夫は仏様に感謝をしたであろう。しかし、生きて行く力は、非常に減少した。

このような例から、大村が言った。仏様の指のような存在でありたいと。考えたことを気付かずに、生徒自らの努力・能力と思い、自分のみがき上げた実力であると思って、次の時代を背負って進んでくれと。仏様の指のような教育技術を持ち

たいと。

4. 若さは大きな財産

仲島は、「子どもは若い教師と言うだけで喜ぶ」と言った¹¹⁾。その理由は、よく遊んでくれる、走るのが早い、給食を良く食べる、元気がある、明るい、運動が出来る、子どもの気持ちを分かってくれる等であった。しかし、若いと言うだけで保護者は心配をする。これを取り除くには、仲島は一に一生懸命、二に一生懸命、三四がなくて、五に一生懸命言った。子ども達と遊び続ける。学級通信を書く。連絡帳は丁寧に返事を書く。参観日に、熱心に授業をする。子どもが分かるまで教えると。

これに対して大村は、25歳以上のアイデアはだめだと言った¹²⁾。25歳を超えると、これまで考えたアイデアは深まって円熟になるが、新しい良いアイデアは出てこない。大村は信州（現在長野県）の教師時代、アイデアを次々に考え、蓄積した。未熟な形で出発し、一つ一つ完成させて行く間に、43年間に過ぎた。急に浮かんだアイデアを書き留めた。そして、常に工夫をした。何か新しい工夫を行ってみようと考えていると、新しいアイデアが浮かんだ。急激な変化の中で生きている子どもを、教師は手の中に持っている。この大切な子どもに対して、大きな責任を負っている。

大村が言った25歳の区切りは、とりあえず若い時に考えたアイデアが良いということである。ノベール賞を取った人達も、そのための研究は20歳代で行ったものであることが多い。特に、著者が特別支援学校で経験したのは、若い教師が常に新しいアイデアで教育に当たっていた。アイデアがないと、子ども達は学んでくれなかった。

5. 職員会議で反論できる教師に

仲島は、先輩教師に自分の意見を戦わす勇気を持って欲しいと言った¹³⁾。仲島は職員会議で、校長に次のように反論した。校長が「平均台で怪我をした子が出たので、平均台では今後遊ばせない

で」と言った。これに対して、仲島は「むしろ子どもに遊ばして、平行感覚を伸ばすことが大事だ」と。校長が「安全第一、怪我をしたら大変だ」と。仲島は「怪我をして大変なのは、子どもでなく、校長先生自身ではないですか」と。この後、仲島は教頭から叱られた。しかし、これを契機として、学校は子どもの安全を論議するようになった。

これに対して大村も同様に、職員会議で「口語教育研究」を強く勧められた先輩教師に対して、「作文教育研究」ではだめですかと反論した¹⁴⁾。

6. すばらしい出会い

仲島は、子どもを惹きつける着任式での出会いを次のように言った¹⁵⁾。着任式の最後に、「今日の休み時間、体育館の前に集まって下さい。一緒に遊びましょう」と言った。また、朝礼台の上で、ジャンプした。「かけっこが得意だから、先生と勝負したい人は、二時間目が終わったら後、この朝礼台に来て下さい」と。結果、たくさん子どもが来て、かけっこをした。このような出会いが始まると、最初からプラスαになったと仲島は言った。

始業式後、教室の黒板にクラス全員の名前と、教師からの一言を書いた。子どもの勉強に対する意欲が出たと。

先入観を持たない出会いをするようにと仲島は言った¹⁶⁾。同様のことは、教育方法論におけるハロー（光背）効果がある。英語は halo、名刺で次の意味がある。①かさ、暈（太陽、月などの）、②後光（聖人、聖徒等の頭の上方に描かれた輪）、③有名な人（事件）を取り巻く栄光。眩暈（げんうん）効果、後光効果、ハロー効果等と言う。ハローは、月が傘を被っているような、ぼんやりした光の輪の状態を意味する。子どもの時、両親が人格者だから、その子どもも人格が高い。兄の成績が大変良いから、弟も良いに違いない。一度非行経験のある子どもは、全ての点で悪く見る。教師は、この光背効果に注意が必要である。

新学期始め、前の担任から引き継ぎがある。あ

る子は親が離婚して、単親家族（母子、父子家庭）、万引き等補導歴がある。これらの引き継ぎは、子どもの教育上参考にして良いが、それらを全面に出してはいけない。

仲島は、岩井の授業との出会いを次のように言った¹⁷⁾。段ボールを使って忍者ごっこを行った。「次はこれをしなさい」「ここに手をつけて回りなさい」と言うような、従来の「教える教育」でなかった。子ども一人ひとりが自分なりの動きで必死に創り出し、それを教師が紹介し、子ども達に広げた。岩井の教育は「教えない」だった。「子どもが自分の力で、自分で歩いて行くことができるように」と教育した。

また仲島は、筑地の授業との出会いを次のように言った¹⁸⁾。チャイムが鳴っても築地は登場しなかった。しかし、子ども達は自分達で授業を始めた。彼らは意見を出し合い、前に出て説明をし、お互いのところへ行って話をし、授業中自由に移動し学習を進めていた。知らないうちに築地が登場し、一言何かを言うと、再度議論が始まった。そして知らないうちに、授業が終わった。朝の会では、子ども達はどんどん議論をし、板書も自分達で行い、学習を進めていた。

この二つの授業が、仲島の生涯の目標になった。

7. 遊びのすすめ

仲島は、「悩んだ時は、とにかく子どもと遊ぶ」と言った¹⁹⁾。遊びに熱中すると、悩んだ事態が好転したと。子ども時代に遊んだ体験のある人は、人間としての楽しさや辛さ、そして優しさを知っていると。教師が一番に運動場に飛び出し、子どもに教師と一緒に遊ぶ楽しさ、友達と一緒に身体を動かすことの心地よさを味あわせる。

仲島は、遊びの中に道徳心があると言った。自由に好き放題にドッジボールをしていた子が、教師と一緒にやるようになってから、ルールを守ったり、友達を助けたりして、いい経験をした。それは、教師がいる時のみだと反論があった。しかし、一度いい経験をした子は、自由に好き放題に

するより、いい経験の方が心地よいと感じ、変わった。

8. 忘れられない思い出

仲島は、高機能自閉症あるいはアスペルガー症候群の K 子との思い出を次のように言った²⁰⁾。一年生担任で戸惑っていた時に、さらに K 子に振り回された。そのような時、K 子が東京へ転向することになった。仲島は心の中で喜んだ。母親が感謝して言った時、仲島は「お母さん済みませんでした」と、心の底から自分を恥じたと。K 子が学校のそばを通っている新幹線で東京へ行く日に、クラスの子ども達と給食時間まで手を振った。後日、母親から「皆さんが大きく手を振っている姿を、K 子はじっと見つめていた」と。仲島は、「K 子さえいなければ」から、「K 子がいてくれたお蔭で」と言う気持ちに変わったと。そして、「やっと教師になれた」と仲島は言った。

仲島が障害児教育に当たって上述のように変わった。そして、教師になれたと実感したことは、全ての教師が経験して欲しい。

著者が勤めた特別支援学校での経験から、特別支援学校の教師は、障害児が少しでも理解しやすいように、アイデアを駆使した教材で授業を行っていた。そこでは、教師の仕事の一つである奉仕（聖職）の精神が求められた。そして、多くの教師は、管理職が心配したが夜遅くまで、さらには土日に学校へ出勤し、子ども達に役に立つ教材を作っていた。

9. 褒める

仲島は、教師自身が感動したことを褒めるのが一番だと言った²¹⁾。いつ褒めるかは、その場で直ぐに褒める。子どもの学習について、有名なスキナーの理論に基づいている。褒める場所は、クラス全員の前で、母親の連絡帳、個人懇談会、通知表、家庭訪問、学級通信で行うと良いと。

10. 研究会

仲島は、教師が成長して行くための一番は授業と言った²²⁾。そのためには、人に見てもらって「研究授業」を行う。学級づくりが出来ていないから研究授業を行うと。

同じように、教師の研究の重要性について、大村は次のように言った²³⁾。大村は研究することは「教師」の資格であるといった。研究しない理由は、前進する気持ちがない。研究は苦しい。子どもは一步でも前進したいと行動する。教師は、子どもと同じ世界にいる。同じ世界にいない教師は、教師として失格である。子どもと一緒に遊んでいれば良いと言うのは安易な考えだ。研究をして、子どもと同じように伸びる気持ちを持つことが、教師の資格だと。

具体的には、毎月一回研究授業を行う。いずれの教師も使用したことのない教材で、教科書に載っていないもので。方法は、今まで一度も使用したことがないもので。古い方法は老いてしまう。この古い方法では、教師を辞めるべきだ。ベテランになっても研究を行うように。忙しいから研究する暇がないは、言い訳である。大切なのは、研究することで、子どもと同じ世界にいることである。

しかし、現実には教師は、大村が言った研究が出来ない。学校のみで仕事が終わらず、自宅に持ち帰って仕事を行っている。さらに、不登校児への対応、クラブ活動顧問になると、朝練習、土日練習に子どもと一緒に付き合う。とても、研究が出来ない教師が多い。このように研究が出来ないで持って、教師の資格がないと結論するには、言い過ぎかもしれない。

11. 作文指導

仲島は、子どもに書かせるようにさせる作文指導について次のように言った²⁴⁾。子どもが「書きたい」、「これくらいなら書ける」の気持ちを起こさせる。原稿用紙を配って「これに書きなさい」は悪い例だ。大学ノートの半分くらいが良い。必ず友達の記事を紹介する。感動体験をさせる。遠

足の後見たことを。教師自身が記録をつける。研究と同じように、教師は「忙しいから書く暇がない」と言い訳をするべきでない。仲島はポケットに入る小さなメモ帳を常に携帯し、そして気付いた時には、直ぐに取り出して書き込んだ。

大村は、「教師は作文を家で書かせるな」と言った²⁵⁾。学校で書かせる時、悪い教師はお金の計算をし、次の授業の下調べをする。これは作文を教えていないことである。

作文を書けない子どもに対して、「その先を書いてごらん」と隣に書いてやれば良い。止まっている子どもに対して、「その木は何のきでしたか」とか、「そこで何を見ましたか」とその横に書いてやる。子どもは見たものを思い出して書く。そして、さらに文章を書いて行く。書けない子どもは、教師が来て何とかしてくれると無意識に、心から待っている。

子どもが作文を書けないのは、教師の恥である。子どもが書いたものを、下手だ、上手だと言うのは、指導者でない。批評家である。これは、教師としてすべきでない。子どもが書けなくなったのは、教師が失敗したと言うことである。教師は何も書けないでいる生徒を、書かせるようにする専門職である。

著者が教育を受けた昔の小中学校(1950-1960)では、子どもが作文を書いている授業時には、大村が言ったように教師は決まってお金の計算をし、次の授業の下調べをしていた。大村が言った教えない教師が多くいた。

12. 人格教育

仲島は、人権教育は学級づくりや仲間づくりそのものだと言った²⁶⁾。人権教育は難しいが、優しい人を育てるものである。この難しさを説明するために、堀井の「氷山の一角説」²⁷⁾を引用した。氷山の海水面に見えている部分を、目に見える実態的差別ととらえると、これまでの長いさまざまな取り組みによって、氷山の高さは低くなった。差別は確実に少なくなった。差別をなく

すためにはどうするか。それは、海水温度を高めて、冰山を溶かす。そして、この海水の温度は、日常の人権意識だと。人権教育は「わかる」教育でなく、「感じる」教育であると。学校での人権教育は、全教育活動を通して行われる。その中心になるのが「学級づくり」であると。クラスで一番厳しい立場の子が、生き生きと過ごせる学級づくりだと。

13. 体育

仲島は、体育の学習は人間としての生き方を学ぶことだと言った²⁸⁾。「どのようにしたら跳べるだろう」「もう止めたい」、でも友達が励ましてくれる。「先生も見ていてくれる」「苦しいがやってみよう」と、子ども達の心が揺れ、喜び、苦しみ等の共有体験が大切だと。このような社会性や人間性を伸ばす学習過程がある。「生きる力」や「心」の教育がある。

また、土谷を引用して、一番苦手な子が生き生きと活動する体育の授業をつくるのが大切だと言った²⁹⁾。実践例として、二分脊椎症で両足が不自由 Y さん、口蓋裂で片目が見えない O さん、心臓病の T さんについて、仲島は次のように工夫した。ゴールの工夫は、投げ込み型とした。点数が入るようにキーパーはなし。ルールづくりは子ども達に任せた。技術面の目標はなく、良いチームづくりとした。障害のある子が、シュートが打てるように、子ども達が考えた。時間は十分に取った。それが子どもを育てる近道だ。二分脊椎の Y さんは、これまで体育の授業は見学だった。ましてや、ボールゲームには参加できないと思われた。体育の学習は、子ども達の生き方に「自信」と「勇氣」を与えた。

著者が勤めた特別支援学校での経験から、特別支援学校の教師は体育の授業で、障害児のために仲島が工夫した同じ方法で行っていた。

14. まとめ

これまで近代日本を代表する福沢、沢柳、野口、

倉橋、小原の教職論があった。近年、戦前・戦後を通して高等女学校・新制中学校の国語科教師であった大村の教職論が出された。続いて、2008年に仲島の教職論が出された。そこで本稿では、この仲島の教職論について、一考察を試みた。

教師の仕事の魅力は、素晴らしい出会い、温かなつながり、最高の感動がある。教師の仕事の特徴は、鏡のようであり、やればやるだけ子ども達の反応がある。若さが大きな財産だ。職員会議で先輩教師に反論できる教師に。教師は子どもと一緒に遊ばなければならない。障害児教育、褒める、研究をすることが大切だ。自然と書かせるような作文指導を。人権教育は学級づくりや仲間づくりそのものだ。体育の学習は、人間としての生き方を学ぶ。等など論じた。

引用文献・図書

- 1) 会田倉吉：福沢諭吉；吉川弘文館、(1987)
小泉信三：福沢諭吉；岩波書店、(1966)
- 2) 小原國芳・小林健三：柳澤教育—その生涯と思想；玉川大学出版部、(1961)
- 3) 石橋哲成：日本教育の開拓者 野口援太郎 1、2、3；世界教育連盟日本支部「教育新世界」41号・42号・43号、(1997-1998)
- 4) 湯川喜津美：倉橋惣三の人間学的教育学；玉川大学出版部、pp.60-80、(1999)
- 5) 小原國芳：教育とわが生涯；南日本新聞社、(1994)
- 6) 大村はま：教師大村はま 96歳の仕事；小学館、(2003a)
大村はま：考えることの教育；ちくま新書、(2003b)
大村はま：教育に魅力を；人と教育双書、(2005a)
大村はま：授業を創る：人と教育双書、(2005b)
大村はま：灯し続けることば；小学館、(2004)
大村はま：日本の教師に伝えたいこと；ちくま学芸文庫、(2006)
- 7) 仲島正教：教師力を磨く；大修館書店、(2008)
- 8) 仲島正教：教師力を磨く；大修館書店、p.14、pp.16-18、(2008)
- 9) 仲島正教：教師力を磨く；大修館書店、p.34、(2008)
- 10) 大村はま：教えるということ；共文社、pp.129-133、(2007)
- 11) 仲島正教：教師力を磨く；大修館書店、pp.39-48、(2008)
- 12) 大村はま：教えるということ；共文社、pp.26-29、(2007)
- 13) 仲島正教：教師力を磨く；大修館書店、pp.47-49、(2008)
- 14) 大村はま：教えるということ；共文社、pp.14-15、(2007)
- 15) 仲島正教：教師力を磨く；大修館書店、pp.57-63、(2008)
- 16) 仲島正教：教師力を磨く；大修館書店、pp.64、(2008)
- 17) 岩井邦夫：子どもが生きる忍者の体育 1-3；明治図書、(1994)
- 18) 落合幸子・築地久子：築地久子の授業と学級づくり；明治図書、(1994)
- 19) 仲島正教：教師力を磨く；大修館書店、pp.82-84、(2008)
- 20) 仲島正教：教師力を磨く；大修館書店、pp.95-97、(2008)
- 21) 仲島正教：教師力を磨く；大修館書店、pp.100-113、(2008)
- 22) 仲島正教：教師力を磨く；大修館書店、pp.121-126、(2008)
- 23) 大村はま：教えるということ；共文社、pp.20-26、(2007)
- 24) 仲島正教：教師力を磨く；大修館書店、pp.162-171、(2008)
- 25) 大村はま：教えるということ；共文社、pp.39-51、(2007)
- 26) 仲島正教：教師力を磨く；大修館書店、pp.183-194、(2008)
- 27) 堀井隆水：人権文化の創造；明治図書、(2000)
- 28) 仲島正教：教師力を磨く；大修館書店、pp.203-220、(2008)

- 29) 小林篤編：土谷正規の体育；タイムス、
(1981)

参考図書

- 1) 日本民間教育研究団体連絡会：現代教師論；
教育史料出版会、(1988)
- 2) 佐島群己・黒岩純子：教職論；学文社、(2005)
- 3) 谷田貝公昭・林邦雄・成田國英：教師論；一
藝社、(2010)
- 4) 米山弘：教師論；玉川出版部、(2007)